

青森県障害児教育史

——盲・聾教育の創始と八戸盲啞学校の設立——

History of the Education for Handicapped Children in Aomori Prefecture

——Beginning of Education for the Blind and Deaf, and Establishment
of Hachinohe School for the Blind and Dumb.——

安 藤 房 治*
Fusaji ANDO

（1983. 12. 15受理）

1. はじめに

近年地方障害児教育史の発刊が相次いでいるが、青森県においてはその歴史の解明が全んど手つかずの状態にあると言っても過言ではない。

本県の障害児教育史に関する事実を断片的にとりあげたものには、『青森県教育史』（青森県教育史編集委員会編，昭和47年），『青森県教育史・下巻』（前野喜代治，昭和33年）がある。『日本の精神薄弱教育—戦後三十年—第四巻 地域史Ⅰ・東日本』（全日本特殊教育研究連盟，昭和54年）に収録されている「青森県」の章（田中光世）は，通史的に記述したものとしては数少ない例ではあるが，これは戦後の精神薄弱児教育を中心にまとめたものであり，戦前の歴史についての言及はない。このような状況の中で，『青森県障害児教育史年表』（青森県障害児教育史研究会，昭和57年）は，青森県障害児教育のあゆみを通史的に明らかにしようとしたものとして評価できる。

本稿は，『青森県障害児教育史年表』中の歴史的事項およびその資史料に依拠しながらも，新たな資史料を加え，明治期を中心に，八戸盲啞学校開設に至るまでの障害児教育史を明らかにすることを目的とした。

2. 八戸盲啞学校設立までの盲，聾啞児教育

(1) 寺子屋での教育

江戸時代の寺子屋に多くの障害をもった児童が在籍し教育を受けていたことは「特殊教育の前駆²⁾」とされている。本県においてもこの事実が明らかにされている。まず第一の事例は，三浦元隆の寺子屋（1749～1874，現南津軽郡尾上町）での盲啞児教育である。この事例は「本県における特殊教育の濫觴である³⁾」とされているが，詳細な教育の内容は明らかになっていない。第二の事例は，安定寺の寺子屋（現青森市，1825～1887）での啞児教育である。前野喜代治は，本寺子屋においては夜間啞者に対して習字の指導がなされていた事実を明らかにし，以下のように評価している。⁴⁾

「他の寺院は一般童蒙の指導にも手をさし伸べ得なかった当時において，安定寺七世寿教以後歴代の住職が，昼間多数の子弟の教育に力を致したのみならず，夜間更らに啞者の指導に努めたことは特筆すべき功業である。それは常に青森における啞者教育の嚆矢というのみでなく，私の知る限りにおいて，日本として最も早く啞教育に着手した事例と思う」

江戸時代後期，すでに全国的にかなり多数の障害児童が寺子屋にて教育をうけていた事実を考慮すれば，前野の評価はいささか過大評価の感はまぬがれ得ないが，本県における盲，聾啞教育の前駆的試みとして注目に値する。

* 弘前大学教育学部心身障害学科教室

(2) 近代教育制度の成立と障害児の就学

1. 義務教育の拡充と就学義務猶予・免除対象の明確化

明治5年(1872)の学制頒布とそれにもとづく教育制度の確立は、わが国近代教育の発足とされている。本県においても、藩学、寺子屋等旧来の教育施設にとってかわって小学校等公約教育機関が次々と設置されていった。

近代教育の確立のための課題の一つは義務教育制度による国民皆学の実現であった。政府は、明治12年(1879)の小学校令およびその後の二度の改正により義務教育体制を整備する一方、地方に対しては文部省を通して就学督責体制の確立を迫った。小学校令および地方での就学督責体制の確立により、わが国の義務教育就学率(男子)は明治33年(1900)90%を超えた。

このような義務教育の拡充、義務教育就学率の向上は、就学義務の猶予・免除対象を明確化していく過程と表裏一体の関係にあった。すなわち、表―1.に示されているように、第一次小学校令はまず就学義務猶予

表―1. 就学義務の猶予・免除規定

| 法 令 | 就学義務の猶予 | 免 除 |
|---------------------|---|-----------------------------|
| 第一次小学校令 明治 19. 4 | 事由：疾病，家計困窮， 其他止ムヲ得サル事故 (府知事県令の許可) | な し |
| 第二次小学校令 明治 23.10 | 事由：貧窮，疾病，其他已ムヲ得サル事故 (監督官庁の許可を受けて市長村長が) | |
| 第三次小学校令 明治 33. 8 | 事由：病弱又ハ発育不 完全 事由：保護者ノ貧窮 (いずれも監督官庁の認可を受けて市町村長が) | 事由： <u>瘋癲</u> ，白痴又ハ 不具廢疾 |

表注) 荒川勇・大井清吉・中野善達『日本障害児教育史』47頁より抜粋

対象を明確化し、第二次小学校令は就学義務猶予・免除の対象規定をした。そして、第三次小学校令は「病弱又ハ発育不完全」等を就学義務猶予に、「瘋癲，白痴又ハ不具廢疾」を就学義務免除対象とした。伊藤によれば「天皇制公教育体制が構築されてゆくなかで、障害児は義務教育の対象外であることが、義務教育を規定する教育法令によって明確化していった⁵⁾」のである。

青森県も、明治初期は、種々の就学奨励政策により就学の督励を強化し、就学の実を上げる一方で、政府・文部省の指導にしたがって、就学義務猶予・免除制度を整備していった。

明治14年(1881)の文部省通達「就学督責規則起草心得」を受けて、同年青森県は「就学督責規則」を定めた。同規則によれば、就学不能の事項について以下のように規定している。

「第十条 第一類ノ学齡児童ニシテ教育令第十五条ニ拠リ已ムヲ得ザル事故ト称シ就学スルヲ能ハザルモノト認ムベキ事項ハ左ノ如シ

第一項 瘋癲白痴若クハ篤疾ニ罹ル者

第二項 親族中瘋癲白痴若クハ篤疾ニ罹ル者アリ其看護ニ給待スル者

第三項 盲啞聾塞ノ廢疾ニ罹ル者

第四項 居住ノ地方人家稀疎殆ンド無煙ノ僻郷ニシテ就学ノ方便ナキ者

右ノ外家貧匱ニシテ学資支弁ノ途ナク学区ニ於テ貧生特別就学の方法設立セザル際ニアリテハ暫ク就学スル能ハザル事トス」(下線は筆者)⁶⁾

明治19年(1886)に定められた青森県「学齡児童就学規則」⁷⁾は、同年の第一次小学校令にしたがって、就学義務猶予条項を規定し、「疾病」「家計困難」などをその対象とした。明治33年(1900)の青森県「学齡児童就学に関する細則」⁸⁾は、就学義務猶予・免除対象については、第三次小学校令(表―1.参照)の規定に

したが、申し立てや許可等に関する具体的な手続きを定めた。

青森県の就学に関する「規則」「細則」の経過が示すように、県は当初、「癡癲白痴」などとともに「盲啞聾」の障害児も就学不能児としていた。しかし、その後の就学義務猶予・免除の対象としては、小学校令すなわち府・文部省の政策にしたがい、「盲啞聾」を規定しなかった。

2. 盲、聾啞児の就学

青森県は、盲、聾啞児の就学奨励策を講じたとは言えないが、盲学校や盲児教育に限定すれば、その必要性や可能性を全く否定していたわけではなかった。それは以下の二点において明白である。まず第一に、青森県は明治14年(1881)の「就学督責規則」を除いて、就学義務猶予・免除の対象として盲、聾啞を特別に規定しなかったこと、第二に、明治9年(1876)の『文部省第四年報』（「青森県」の項）において、「幼稚園盲人学校等」は「普通小學ノ設置普子カラサレハ暫ク之ヲ設クルノ舉ニ致ラス」（306頁）とされており、同様の記述が『青森県学事第二十二年報』（明治26年）にも見られることである。こうした県の姿勢、政策の下で就学する盲、聾啞児も少なくなかったと思われる。

表一2.は、少なくとも明治30年代以降、盲児や聾啞児が就学していた事実を示している。明治期において、

表一2. 学 齡 児 童 中 盲 聾 啞 者

| 年 度 | 盲 者 | | | | 聾 啞 者 | | | | 盲 聾 啞 者 | | | |
|---------|-------|----|-------|----|-------|----|-------|----|---------|---|-------|---|
| | 学 齡 者 | | 修業スル者 | | 学 齡 者 | | 修業スル者 | | 学 齡 者 | | 修業スル者 | |
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 |
| 明 治 31 | 104 | 53 | — | — | 86 | 34 | 4 | — | 1 | — | — | — |
| 32 | 68 | 38 | — | — | 68 | 33 | 6 | 1 | 1 | — | — | — |
| 33 | 66 | 39 | 1 | — | 64 | 31 | 4 | — | — | — | — | — |
| 34 | 64 | 43 | — | — | 56 | 34 | 1 | 1 | — | — | — | — |
| 大 正 4 | 39 | 35 | 3 | 3 | 35 | 20 | 2 | — | — | — | — | — |
| 5 | 45 | 40 | 3 | 2 | 37 | 27 | 1 | — | — | — | — | — |
| 6 | 39 | 35 | 3 | 3 | 35 | 20 | 2 | — | — | — | — | — |
| 7 | 22 | 27 | 5 | 2 | 28 | 21 | — | — | — | — | — | — |
| 8 | 19 | 19 | 3 | 1 | 36 | 16 | 2 | — | — | — | — | — |
| 9 | 20 | 17 | — | — | 33 | 14 | 2 | — | — | — | — | — |
| 10 | 22 | 15 | — | — | 32 | 12 | 1 | — | — | — | — | — |
| 11 | 18 | 19 | — | — | 30 | 8 | 2 | — | — | — | — | — |
| 12 | 19 | 11 | 2 | 1 | 25 | 8 | 2 | 1 | — | — | — | — |
| 13 | 21 | 15 | 8 | — | 23 | 11 | 3 | 1 | — | — | — | — |
| 14 | 24 | 10 | 1 | — | 27 | 15 | — | — | — | — | — | — |
| 大正15昭和元 | 18 | 11 | — | — | 18 | 19 | — | — | — | — | — | — |
| 昭 和 2 | 14 | 16 | — | — | 27 | 23 | — | — | — | — | — | — |
| 3 | 13 | 14 | 2 | 1 | 13 | 8 | 5 | — | 6 | 6 | — | — |
| 4 | 16 | 16 | 7 | 2 | 8 | 8 | 7 | 3 | 3 | 4 | — | — |
| 5 | 23 | 16 | 8 | 1 | 17 | 22 | 5 | 1 | 4 | 2 | — | — |
| 6 | 13 | 15 | 1 | — | 8 | 18 | 4 | 5 | 3 | 1 | — | — |
| 7 | 15 | 10 | 13 | 5 | 13 | 11 | 7 | 7 | 1 | 3 | — | — |
| 8 | 35 | 15 | 29 | 12 | 20 | 23 | 14 | 17 | — | — | — | — |
| 9 | 14 | 8 | 14 | 8 | 19 | 18 | 16 | 17 | 3 | 5 | — | — |
| 10 | 29 | 22 | 27 | 20 | 34 | 28 | 32 | 27 | 1 | 3 | — | — |

表注) 明治31～34年度は「青森県学事要覧」、他年度は「青森県統計書」より作成した。ただし、昭和4～8年度の数値は、「昭和8年青森県統計書」（第4編「学事」5頁）にもとづいて作成した。なお、「盲聾啞者」とは、盲でかつ聾啞の二重障害者を示している。

盲児や聾啞児が小学校に在籍していた事実は、全国的にもほとんど未解明であり、きわめて貴重な事例である。また、明治36年（1902）三戸小学校において「視話講習会」が開催され、県内から43名が参加し、一週間の講習が行なわれた。⁹⁾ このことは、盲、聾啞児が単に在籍していたのみならず、これらの児童（少なくとも聾啞児）に対して、何らかの指導がなされていたことを示している。しかし、小学校における盲、聾啞児の在籍は、表-2.で示すように、少人数であり、組織的なものとは言えない。したがって、この中から、盲学校、あるいは聾啞学校の設立の要求があがることはなかった。

3. 盲啞学校の設立

青森県における盲学校、聾学校の萌芽は、明治24年（1891）に盲人・永洞清吉らによって設けられた東奥盲人教訓会の組織化である。全国的にも、盲児に対する組織的な教育は、小学校に在籍していた盲児に対して始められたのではなく、盲人等で組織する盲人学校として発足する例が多かった。この理由として、「教育方法の特殊性というよりも、彼らの将来が特定の職業に限られていること」¹¹⁾があげられている。すなわち、盲人の職業として伝統的な鍼治、按摩等の技能を身につけるための教育が要請されたのである。八戸盲啞学校の前身である東奥盲人教訓会も、こうした盲人自身の職業的自立の要求にもとづいて、盲人自身で組織化されたものであった。また盲学校としては、全国第五番目に設立されたものであり、本県の障害児教育史上特筆すべきである。

(1) 東奥盲人教訓会とその教育活動

東奥盲人教訓会は、明治24年（1891）4月、永洞清吉、十日市茂吉、大松由松（いずれも盲人）によって、「失明者に対し担当の教育を授け以て従事生計の資たらしめん目的」¹²⁾をもって組織された。¹³⁾

東奥盲人教訓会は同年11月3日教育事業を開始した。「その会は毎週二、三回集会して諸技術を磨き、教養を高めるために講話などを開き、その生活態度の改善に大いに見るべきものがあり、集る盲人もその数を増し、風紀上の点においても追々成果をあげた」¹⁴⁾というのが初期の教育活動である。その後の教育活動の詳細については不明な点が多いが、以下の『東奥日報』記事（明治43年10月21日付）によって当時の教育活動の一端を伺い知ることができる。

「本會専任の講師は東京盲人學校卒業生にして岩手縣人北村利助氏なり氏は生理解剖地理修身讀本の諸科を毎日四時間以上五時間を擔任教授しつつあり其他會長會員は按摩鍼遊藝等を擔任、現在十六名の盲生は岩手縣人一、上北郡一、本郡十四名の内五名は當町人にしてこれ等は自宅通學親戚等に寄宿、通學、曾内寄宿にして曾内寄宿生の内三名は夜間等の放課後に於て町内有志の愛顧を受け下揉みを爲して幾何つつの所得にて苦學し居れり」

また、同記事によれば「速成科（三年）」「専修科（四年）」「隨意科」の三科をおき、速成科は「青年に到りて盲者となれるもの或は相當の經驗を有する者」を、専修科は「十歳以上の児童」を対象とし、両科とも按摩、鍼を教授した。隨意科においては「遊藝即ち三味線及御國浄瑠璃等」を教授した。¹⁵⁾

東奥盲人教訓会の教育を受け卒業したものは明治末年までの20年間に117名を数えた。¹⁶⁾この当時、「盲人の家庭の多くは極貧者にあれば本會に在學するも唯單に食費も家庭的自炊生活なれば一ヶ月三圓以内にて足ると雖も三年（速成科）以上四年（専修科）の修業期送費するは甚だ困難」な状況であった。¹⁷⁾したがって、教訓会は生徒より授業料を徴収することは不可能であったばかりか、彼らの食費まで負担しなければならなかったため、運営資金の調達が至上課題であった。

盲人教訓会には、主として三種類の資金調達方法があった。まず、第一は、「会費盲人達の慈善的頼母子講を数十回其所得を以て」¹⁸⁾充当するという盲人自身からの資金であった。¹⁹⁾第二は「大方人士の慈善博愛に訴へ寄付を以てこれに充つる」²⁰⁾という民間篤志家からの寄付であった。²¹⁾第三は、三戸郡からの補助金をはじめとする公的資金であった。²²⁾明治43年度決算において、以下のようにその具体的金額が示されている。²³⁾

歳入総額金 金四百十八円也

内訳 金百円也

郡役所補助

| | | |
|-------|----------|--------|
| | 金百円也 | 慈善講寄附 |
| | 金十八円也 | 基本金利子 |
| | 金貳百円也 | 一般寄附 |
| 歳出総額金 | 金四百十八円也 | |
| | 金二百二十八円也 | 盲人教育費 |
| | 金二十円也 | 書籍及器具費 |
| | 金五十円也 | 修繕料 |
| | 金百二十円也 | 雑 費 |

東奥盲人教訓会による教育事業は、盲人の職業的自立を目ざして、盲人自身の手によって始められたものとして、全国的にもきわめて先駆的であった。²⁴⁾教育事業は、初期の変則的な技能講習会という形態から次第に学校形態へと整備がすすんでいった。また、財政的にも、初期の段階においては、創立者たちの資金および創立者たちを支援する篤志家からの寄附での運営であったが、後には三戸郡からの補助金²⁵⁾が加わり、次第に安定さを増したものと思われる。こうした、盲人教訓会による教育事業の充実、発展がその後の私立学校への昇格の条件と生みだしていった。

(2) 私立東奥盲人学校の発足

東奥盲人教訓会の実績は、青森県当局の盲啞学校設置に対する政策的対応を具体化することになった。さらに、文部省が明治24年(1900)に定めた「幼稚園 図書館盲啞学校他 小学校ニ類スル 各種学校ニ 関スル規則」が、県の政策をより積極的なものとしたと思われる。明治33年(1900)、県は「幼稚園、盲啞学校²⁶⁾ソノ他小学校ニ類スル各種学校及私立小学校ノ設置廃止ニ関スル規定」を定めた。また、明治40年(1907)「盲啞児童ノ教育ヲ施設セントスル者ニシテ其ノ計画ノ確實ナル場合若ハ既ニ經營セル者ニシテ其成績良好ナリト認ムル時ハ其ノ費用ノ幾部ヲ補助スルコトアルベシ」と「普通教育奨励金」の対象を盲啞教育にまで拡大した。²⁶⁾このような県の政策は、東奥盲人教訓会の教育事業を私立学校組織へと発展させる条件となった。

東奥盲人教訓会は、明治44年9月26日、県に対して私立東奥盲人学校の認可申請をした結果、同年12月20日付けで、私立学校令(明治32年)²⁷⁾にしたがい県知事によって私立学校として認可された。

「私立東奥盲人学校規則」²⁸⁾によれば、同校は「盲人ヲ教育シ自立ノ道ヲ得シムル」ことを目的とし、普通科と技芸科を置いた。技芸科には「音曲鍼治按摩ノ三分科」が置かれた。目的および設置学科は、私立学校設立認可以前の実態を引きついだものであったが、修業年限(4年)や普通科の教科目にみられるように、従来以上に、一般小学校における教育内容との共通性を持つようになった。東奥盲人学校は私立学校として認可を得ることにより、組織的にも、教育内容においても公教育を盲児に保障する学校としての性格が明白になった。

東奥盲人教訓会は、私立東奥盲人学校が発足した後も後援組織として存続し、学校の経営を援助した。無認可時代より公的援助も増したとは言え、発足当初その経営は困難であった。たとえば、翌年「私立東奥盲人学校趣意書」²⁹⁾を発し、一般に寄附金を募った。「趣意書」は以下のように訴えている。

「今ヤ県郡町及内務省ヨリハ盲者保護トシテ補助金ヲ交附シ大ニ斯道ヲ奨励セル然レ該補助金タル到底本校ノ維持ヲシテ充分ナラシムルニ足ラザルハ勿論将来益々本校ノ発展ヲ図リ諸般ノ設備ヲシテ完全ナラシメントスルニハ尚幾多ノ経費ヲ要スルヤ必セリ之ガ収入ノ道タル一二有志諸氏ノ同情ニ 訴ヘザルヲ得ズ」

大正12年に初めて文部省より交付金(50円)があったのをはじめ、昭和にかけて各種の交付金等があったが、こうした財源が盲学校維持発展の背景の一つであった。以下はその一覧である。

| | |
|-------------|--|
| 大正12年(1923) | 下賜金(200円)、文部省交付金(50円) ³⁰⁾ |
| 昭和2年(1927) | 恩賜財団慶福会からの交付金(2,000円) ³¹⁾ |
| 昭和4年(1929) | 下賜金(300円)、交付金(文部省:233円、県:1,000円、同社会課:200円、 ³²⁾ 戸市:700円) |

盲人学校の生徒定員は40名とされていたが、初期においては定数を満たしたことはなかった(表-3.)。

先述したように、盲人生徒は貧困家庭出身者が多く、授業料は無料とはいえ、4年間の在学生活を送るのは困難であったと思われる。以下の証言はこの当時の就学上の困難の一端を反映していると言える。

表—3. 八戸盲啞学校在籍者数

| 年 度 | 総 数 | 盲 部 | | | 聾 啞 部 | | |
|--------|------------|----------|---------|-----------|----------|----------|----------|
| | | 男 | 女 | 計 | 男 | 女 | 計 |
| 大 正 4 | 17 | 12 | 5 | 17 | | | |
| 5 | 30 | 19 | 11 | 30 | | | |
| 6 | 17 | 12 | 5 | 17 | | | |
| 7 | 22 | 17 | 5 | 22 | | | |
| 8 | 12 | 10 | 2 | 12 | | | |
| 9 | 20 | 16 | 4 | 20 | | | |
| 10 | 23 | 23 | — | 23 | | | |
| 11 | 28 | 28 | — | 28 | | | |
| 12 | 33 | 33 | — | 33 | | | |
| 13 | 26 | 26 | — | 26 | | | |
| 14 | 26 | 25 | 1 | 26 | | | |
| 大15・昭元 | 30 | 29 | 1 | 30 | | | |
| 昭 和 2 | 28 | 27 | 1 | 28 | | | |
| 3 | 30 | 22 | — | 22 | 5 | 3 | 8 |
| 4 | 8 ・23 | 2 ・19 | — | 2 ・19 | 4 ・2 | 2 ・2 | 6 ・4 |
| 5 | 22 | 13 | — | 13 | 5 | 4 | 9 |
| 6 | 32 ・32 | 1 ・13 | — | 1 ・13 | 4 ・3 | 5 ・3 | 9 ・6 |
| 7 | 32 ・48 | 3 ・13 | — ・1 | 3 ・14 | 7 ・3 | 7 ・3 | 14 ・6 |
| 8 | 62 ・33 | 6 ・13 | 1 ・3 | 7 ・16 | 7 ・2 | 11 ・3 | 18 ・5 |
| 9 | 89 ・22 | 12 ・9 | 6 ・4 | 18 ・13 | 16 ・2 | 10 ・1 | 26 ・3 |
| 10 | 100 ・22 | 10 ・9 | 4 ・3 | 14 ・12 | 12 ・3 | 13 ・2 | 25 ・5 |

表注) 本表は「青森県統計書」にもとづいて作成した。・印を付した数字は「学齢外ノ者」を示す。但し、昭和3年以前及び昭和5年は区分されていない。なお、校名は、大正14年に「私立八戸盲学校」、昭和2年に「私立八戸盲啞学校」と改称した。

「時々生徒が急にふえてみたり、五、六人に減ったりで、出欠率がひどかったようでした。先生が、『誰々君、今日はよく来たね』とほめると、『はァ、今日はついであって出て来ました。』(ドッ³³⁾と笑声がおこる)といったようなぐあいでした。」

東奥盲人学校は、大正14年(1925)「私立八戸盲学校」と改称し、県の承認の下で昭和2年(1927)「聾³⁴⁾啞部」設置時点で「八戸盲啞学校」と改称した。「聾啞部」設置時において、生徒定員は次のようになった。³⁵⁾

盲 部 初等部20名、中等部鍼按科20名、別科10名
聾啞部 初等部20名、中等部工芸科20名

先述したように、青森県内にあっては、小学校に聾啞児が在籍し、教育がなされていたことから、聾啞児教育についての潜在的な要求はあった。潜在的な要求を背景にしながらも、私立青森盲学校が「聾啞部」を設置した直接的な契機は、恩賜財団慶福会からの多額の交付(2,000円)であった。³⁶⁾さらに、県の「聾啞部」設置承認を促進したのは、大正12年に成立した「盲学校及聾啞学校令」にもとづく、文部省の指導であった。³⁷⁾『東奥日報』(昭和2年11月9日付)は「盲啞学校の設置に就て本省は大正13年県当局に対し盲啞学校を設

置する事を命じ七年の延期を為す事を得る様にしたが県では13年来今日まで毎年設置延期願を提出」と報じている。「盲学校及聾啞学校令」は、道府県に対し盲学校、聾啞学校の設置を義務づけた。本記事は、県が盲啞学校設置、つまり本県の場合「聾啞部」の設置に対して必ずしも積極的でなかったことを示している。

4. おわりに

本稿では、八戸盲啞学校設立に至るまでの青森県における障害児教育の歴史の一端を解明できた。明治期において盲、聾啞児が就学していた事実は、盲、聾啞児をもつ親たちの潜在的な要求があったことを反映している。しかし、こうした教育に対する要求は、一般小学校においては組織化されることなく、言わば“自然発生的”なまま推移した。むしろ、盲啞学校の設立を可能にする原動力は、東奥盲人教訓会の組織化が盲人たち自身によって行なわれたように、自らの教育要求を組織した盲人たちの活動の中に求めることができる。こうした教育要求の盲人自身による組織化に対する民間篤志家たちの人的、財政的援助および郡、町からの公費補助そして県や文部省の行政的対応によって、八戸盲啞学校の設立、発展が可能になったと言える。

※本稿は、日本特殊教育学会第21回大会（昭和58年10月10日、宮城教育大学）シンポジウム『東北における障害児教育・福祉—その源流をさぐる—』における筆者の報告に加筆したものである。なお、本稿作成にあたり、資料提供等において青森第三養護学校教諭工藤博信氏に多大なる御援助をいただきました。記して感謝いたします。

（注）

- 1) 最近発刊されたものとして以下のものをあげることができる。○愛知県特殊教育の歩み編集委員会、愛知県特殊教育の歩み。昭和52年 ○八坂信男、大分県特殊教育史。昭和52年 ○群馬県盲教育史編集委員会、群馬県盲教育史。昭和53年 ○盲聾教育開学百年記念事業実行委員会、京都府盲聾教育百年史。昭和53年 ○東京心身障害教育百年記念会、東京都心身障害教育百年誌。昭和53年 ○山形県特殊教育史研究会、山形県特殊教育史——精薄・虚弱編。昭和53年 ○長野県特殊教育百年記念事業会、長野県特殊教育史。昭和54年 ○石川県特殊教育百年誌編集委員会、石川県特殊教育百年誌。昭和56年 ○小野完子、北海道肢体不自由児療育史。昭和56年
- 2) 中野善達・加藤康昭、わが国特殊教育の成立。昭和42年。114頁。
- 3) 青森県教育史編集委員会、青森県教育史、第一巻。昭和47年。267～268頁。
- 4) 前野喜代治、青森県教育史・下巻。117頁。
- 5) 伊藤幸恵、わが国における障害児の「教育を受ける権利」の歴史——戦前における障害児の教育機会——。教育学研究、第36巻第1号。昭和44年。20頁。
- 6) 青森県教育史編集委員会、前掲書、第3巻。309頁。
- 7) 同書、475～476頁。
- 8) 同書、805～806頁。
- 9) 荒川勇・大井清吉・中野善達、日本障害児教育史。昭和51年。本書において、岡山県での在籍の事実、宮城師範附属小学校におけるろう児のための特別学級設置、長野尋常小学校における啞教場設置の三事例があげられている。
- 10) 視話法は、聾者に対して発音を指導する場合、各単語に対応した独特の文学（記号）を使用する方法で、かつて小西信八によって各地で伝習された。本県で開催された講習会について以下のような記述を見ることができる。
「本日ヨリ毎週本校内ニ視話法講習会開カル、会員四十三名 講師 本県師範学校教諭 今力太郎 ナリ」
（三戸小学校百年誌。昭和49年。37頁）
- 11) 中野善達・加藤康昭、前掲書。301頁。
- 12) 東奥日報、明治43年10月20日付。
- 13) 組織化の中心であった永洞清吉（1831—1916）は、宮古市出身。八戸藩の按摩、森の一坊を頼って、按摩、鍼灸の技術を学んだと言われている。（青森県人名大辞典、東奥日報社。昭和44年。458頁）
- 14) 青森県立八戸盲学校・青森県立八戸聾学校、創立七十周年記念誌。昭和37年。28頁。（以下、『創立七十周年記念誌』とする）
- 15) 明治34年時点で、「速成科」「普通科」の二科がおかれ、募集人員はそれぞれ10名、25名であった。（『東奥日報』明治34年3月16日付）
- 16) 『私立東奥盲人学校趣意書』、明治45年3月29日。青森県教育史。第一巻。987頁。
- 17) 『東奥日報』明治43年10月21日付。

- 18) 同紙, 10月20日付.
 19) 『創立七十周年記念誌』によれば「三井惣助, 橋勘之助, 武尾徳衛, 坂本定太郎, 武尾甚四郎等諸有志の賛同を得て慈善講(無尽講, 頼母子講の類)になるものを実施してこれが資金とした」(29頁)となっている。
 20) 『東奥日報』, 明治43年10月20日付.
 21) 『創立七十周年記念誌』には, 以下の寄附金募集記録が掲載されている(30頁)。

「

収甲五四二七

三戸郡八戸町大字十一日町

東奥盲人教訓会長 永洞 清吉

明治四十年九月十一日附ヲ以テ寄附金募集願出ノ趣聞届ク

明治四十年 十月一日

八戸警察署長 警部 和泉 正蔵 ㊤

毎年或ハ毎月金品ヲ寄附セラルル方ヲ慈善会員トス

但シ寄附金ハ新聞ヲ以テ広告教可信事」

- 22) 前掲紙によれば「同氏(永洞清吉——筆者注)が経営の功勞と事業の有効を認め本年度より教育費として金百圓を補助さるゝに致れる」ということであつた。また, 『創立七十周年記念誌』は「明治三十年(一八九七年)以来長年月にわたり, 三戸郡役所, 八戸町役場, 青森県より, 東奥盲人教訓会に対し各々金百圓ずつ補助金を交付」したと記述している(29頁)。しかし, 前掲紙においては, 県からの援助はないと記している(明治43年10月21日付)。
 23) 『創立七十周年記念誌』, 30頁。
 24) 初期に設立された盲学校は, 楽善会訓盲院(東京)をはじめ, 盲人以外の者の手による慈善事業として出発した例が多かつた。『創立七十周年誌』は, 「日本人によって行なわれた盲人の教育施設としては京都に次いで本邦第二番目」「他の多くの盲人教育施設は有識正眼者の憐愍と, 同情から出発しているが, 本会の発足は盲人自身の自覚と奮起によって発足しているところに他の類例を見ない」と記している(29頁)。
 25) 青森県令第七十七号。明治33年9月30日。
 「第二條 盲啞學校及小學校ニ類スル各種學校設置ノ認可ヲ受ケントスルモノニハ左ノ事項ヲ具シ稟請スヘシ
 一 設置ノ目的
 二 位置
 三 名稱
 四 教則及教科用圖書, 器具, 器械
 五 入學退學規則, 寄宿舎規則, 生徒心得, 生徒罰則等
 六 學年ノ始終及休業日
 七 生徒定員教員員數
 八 授業料金額及其ノ收入法
 九 經費收入, 支出豫算(私立ニ係ルモノハ維持方法ヲモ記載スヘシ)
 十 設立者ノ履歷書(私立ニ限ル)
 十一 敷地, 建物ノ坪數, 圖面及構造法」
 26) 青森県告示第62号, 明治40年2月19日, 青森県教育効績者名鑑, 大正7年, 5~6頁。
 27) 『創立七十周年誌』によれば, 認可の公文書は以下の通りである(30頁)。

「 指令第三〇六〇号

㊤ 私立東奥盲人教訓会長

永洞 清吉

明治四十四年九月二十六日付願私立東奥盲人学校設置ノ件認可ス

明治四十四年 十二月二十日

青森県知事 武田 千代三郎 ㊤」

- 28) 青森県教育史編集委員会, 前掲書, 第一巻, 989~991頁, 原資料はタテ組みであるため, 原資料中の「同上」を「同左」とした。

「 私立東奥盲人学校規則

第一章 総 則

第一条 本校ハ盲人ヲ教育シ自立ノ道ヲ得シムルヲ以テ目的トス

第二条 本校ニ普通科及技芸科ヲ置ク

第三条 技芸科ハ之ヲ分チテ音曲鍼治按摩ノ三分科トス

第四条 修業年限ハ普通科及技芸科ハ各四ヶ年トス

第五条 技芸科ハ普通科ヲ修ムルモノノ志望ニヨリ其一分科若クハ二分科ヲ兼修セシム

但鍼治ハ普通科第二学年修了シタルモノニアラザレバ之ヲ許サズ技芸科ハ専修スルコトヲ得

但普通科中ノ或ル科目ヲ兼修スル者ニハ之ヲ許ス

第六条 生徒ノ定員ハ各科ヲ通ジテ約四十名トス

第七条 本校ハ授業料ヲ徴収セズ

第二章 学期及休業日

第八条 学年ハ四月一日ニ始リ翌年三月三十一日に終ル

第九条 学年ヲ分チテ左ノ三学期トス

第一学期 自四月一日 至八月三十一日

第二学期 自九月一日 至十二月三十一日

第三学期 自一月一日 至三月三十一日

第十条 休業日ハ左ノ如シ

一 祝日大祭日

二 日 曜 日

三 夏 季 休 業 自八月一日 至八月三十一日

四 冬 季 休 業 自十二月廿五日 至翌年一月十五日

五 学年末休業 自三月廿五日 至三月三十一日

六 鎮 守 祭 日 九月一日、二日、三日

七 創立記念日 十二月廿日

第三章 教科目及其ノ課程

第十一条 各教科ノ教科目課程及毎週教授時数左ノ如シ

普 通 科

| | 第 一 学 年 | | 第 二 学 年 | | 第 三 学 年 | | 第 四 学 年 | |
|-----|----------------|------------------------------------|----------------|--------------------------------|----------------|--------------------------|----------------|------------------|
| 教科目 | 毎週 教授 時数 | 課 程 | 毎週 教授 時数 | 課 程 | 毎週 教授 時数 | 課 程 | 毎週 教授 時数 | 課 程 |
| 修 身 | 二 | 道德ノ要旨 | 二 | 同 左 | 二 | 同 左 | 二 | 同 左 |
| 国 語 | 六 | 点字 五十音、濁音 次清音 庶物ノ名称 文句ノ聴取 | 六 | 言語ノ意義及其 ノ用法 文句ノ聴取及綴 方 | 六 | 同 左 書牘及普通文章 ノ聴取及綴方 | 六 | 同 左 歌詞大要 |
| 算 術 | 六 | 数方 加算減算 | 六 | 加算減算乗算 | 六 | 乗算 除算 度量衡 貨幣 | 六 | 同 左 応用雑題 |
| 地 理 | | | | | 一 | 日本地理ノ大要 | 一 | 前学年ノ続キ |
| 歴 史 | | | | | 一 | 日本歴史ノ大要 | 一 | 前学年ノ続キ |
| 体 操 | 三 | 遊 戯 徒手体操 | 三 | 同 左 | 三 | 同 左 | 三 | 同 左 |
| 裁 縫 | 三 | 運針法 通常ノ衣服ノ縫方 | 三 | 通常ノ衣服ノ縫 方裁方 | 三 | 同 左 | | 通常ノ衣服ノ縫 方裁方繕方 |
| 計 | 六 | | 三 | | 三 | | 三 | |

但裁縫ハ女子ニ限り之ヲ課ス

技 芸 科

| | 第 一 学 年 | | 第 二 学 年 | | 第 三 学 年 | | 第 四 学 年 | |
|-----|----------------|------------------|----------------|--------------|----------------|-----------------|----------------|-------------------------------|
| 教科目 | 毎週 教授 時数 | 課 程 | 毎週 教授 時数 | 課 程 | 毎週 教授 時数 | 課 程 | 毎週 教授 時数 | 課 程 |
| 音 曲 | 六 | 琴表組 裏組 三弦 | 六 | 琴裏組 中組 三弦 | 六 | 琴中組 奥組 三弦 | 六 | 琴奥組 三弦 |
| 按 摩 | 六 | 揉方人体解剖及 生理ノ大要 | 六 | 同 按 左 腹 | 六 | 同 左 | 六 | 実地練習 |
| 鍼 治 | 六 | 浮 水 方 刺方ノ一 | 六 | 刺方ノ二及三 | 六 | 刺方ノ四 経穴名称並位置 | 六 | 刺方五解剖 生理ノ大要実地 練習 病 名 |

各教科互ニ兼修スル場合ト雖毎週教授ノ総時数ハ三十六時以内ニ於テ斟酌ヲ加フルモノトス

第四章 入学及退学

第十二条 生徒ノ入学ハ毎年四月之ヲ許ス

但欠員アルトキハ臨時ニ入学ヲ許スコトアルベシ

第十三条 普通科及技芸科ニ入学ヲ許スベキモノハ年齢十一年以上ニシテ各身体健康種痘又ハ天然痘済
ノモノニ限ル

技芸科ノ鍼治ヲ兼修シ又ハ之ニ入学スルコトヲ得ルモノハ普通科第二学年ヲ修了シタル者又ハ之
ト同等以上ノ学力ヲ有スルモノトス

第十四条 入学ヲ願フモノハ左ノ書式ニ依リ願書ヲ差出スベシ

但保証人ハ八戸町ニ住居シ丁年以上ニシテ保証ノ任ニ堪フル者ニ限ル

書 式 (半 紙)

入 学 願

族 籍 某 子 女
氏 名
生 年 月 日

右者御校へ入学為致度尤本人身上ニ関スル一切ノ儀ハ私共引受可申候ニ付御差許被下
度此段相願候也

族籍, 父兄, 親戚
願 主 氏 名 印
族 籍
保証人 氏 名 印

私立東奥盲人学校校長某殿

第15条 願主及保証人転居シタルトキハ直ニ本校ニ届出ベシ」

29) 同前書. 第一巻. 987~988頁.

30) 『東奥日報』大正12年2月11日付. 青森県教育史編集委員会編, 前掲書. 第4巻. 388~389頁.

31) 『東奥日報』昭和2年11月9日付. 同前書. 第4巻. 548頁.

32) 『東奥日報』昭和4年9月17日付. 同前書. 第4巻. 640頁.

33) 明治44年に入学し, その私立盲人学校時代も在籍した小原ウメ氏の証言 (『70周年記念誌』61頁)。

34) 『東奥日報』昭和2年11月8日付.

35) 『東奥日報』同年11月9日付. 青森県教育史編集委員会, 前掲書. 548頁.

36) 同前書. 548頁.

37) 同前書. 548頁.